



日本キリスト教団
三軒茶屋教会

三軒茶屋 教会通り

第26号 2006年4月発行

〒154-0024
東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL/FAX: (03)3418-4933
発行: 三軒茶屋教会

イエスが十字架によって殺されて三日目の夕方、その弟子二人がエルサレムからエマオという村に向かって歩いていました。彼らは肩をおとし、とめどない愚痴ばなしを続けるのでした。「あの方こそ解放の主である」と望みをかけていたのに、祭司長や議員たちの謀略が十字架につけてしまった」と。師であるイエスが抹殺されるとは、神も人も信じられなくなつた、そんな二人の弟子に、復活のイエスは近づき割って入られたのです。

しかし、
彼らの目は
遮られてい
て、イエス
を認めるこ
とができま

せん。なぜでしょうか。彼らは、イエスに対する自分の期待が叶えられなかつたという、自らのエゴイズムを棚上げにして、すべての矛盾と悪を他人と世の中のせいにしていているという、過ちを犯していたからなのです。孤立と落胆の中にあつた弟子たちに、復活のイエスは、「ああ、物わかりが悪く、心が鈍く預言者たちの言つたことすべてを信じられない者たち」と言つて嘆き、かつてこの二人に預言したイエス自身の言葉を

復活を信じる目

牧師 陣内厚生

思い起こさせます。

ところで、この情景は私たちにどうして象徴的であります。私たちの信仰は、ときに見当はずれの思い込みになり、いつのまにか自分の考えで方向づけをしていることがあるのです。自分の願望を信仰と混同したり、それが叶わぬとなれば、信仰生活の意味を失つてしまい、遠ざかるようになります。エルサレムから離れるように――。しかし、イエスは、そのような私たちを見放そうとはされませ

ん。私たちのあとから追いつき、私たちと共に歩んでくださるのです。目標を失いかけたり、勇気が湧いてこなくなつたとき、私たちに寄り添い話かけてくださるイエスのご存在は、なんと力強いことでしょうか。さて夕闇が迫る頃、弟子たちは見知らぬ旅人（イエス）に何か惹かれるものを感じ、引き止めました。彼らが食事の席につき、イエスが祝福の祈りをされたとき、二人の目が開け、復活されたキリスト、イエス



であることが分かつたのです。今までさまざまな疑惑のゆえに遮られていた目が、そして信仰が、この出会いによって一変しました。「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と。復活のイエスに出会って、初めて心に希望の火が燃えたのです。

この不思議な経験から、弟子たちの人生が躍動し始めます。失意の中にあつたエマオ途上から、「時を移さず」イエス復活のエルサレムへと方向を転換したのです。人生の目的や意味を喪失し、真に信じるべき対象を見失つていたことがウソのように、新しい生命が現実のものとなります。イエスの復活によって、無から有が生じ、死は生命に、時間が永遠につながることで、確信できます。

今日、復活の主キリスト・イエスは、世の無神論的なエゴイズムの横溢するただ中で、愛と真実の生きた言葉をもって人びとに話しかけられます。それは私たちを再創造し、再生させてくださる唯一の生きた力であり、あります。